看取りの介護

～事例をとおしての学び～

社会福祉法人紀和福祉会
介護老人福祉施設　やまぼうし

緩和ケアチーム
〇濱野優真　田中麻美　奈良垣員代

やまぼうし施設概要

- 社会福祉法人　紀和福祉会
- 介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）
- 短期入所生活介護（ショートステイ）
- 利用定員　110床うちショート10床
- 全室個室ユニット

スタッフ構成

・ケアマネージャー	1名
・生活相談員	2名
・作業療法士	1名
・管理栄養士	1名
・介護職員	68名（常勤47名＋非常勤21名）
・看護師	7名（常勤5名＋非常勤2名）
・事務員（営繕、清掃）	7名

やまぼうしの理念

一人ひとりの主体性と尊厳を尊重し、生命と生活の質を大切にする支援を行います

やまぼうしの看取り介護

- 本人に苦痛を伴う処置対応はできる限り行わない
  また、安楽を念頭に置き家庭的な環境で過ごしていただく
- 身体的なケアでは安心できる声かけをし、身近に人を感じられるような尊厳を守る援助をする
- 医師に相談し指示を仰ぎながら、苦痛を和らげる方法をとり、施設内でできる限りの看取り介護をする
- ご家族の希望に沿った対応を心がける
- ご本人ならびにご家族の希望や意向に変化が生じた場合は、その意向に従い援助する。ACPの実施

O様の事例

手術のために入院したが、状態が悪くなり施設での看取りを希望された

退院後、寝たきりとなり居室で過ごされるようになった

意思疎通は可能で、希望など話された

徐々に、食事はむせ込みがあり摂取できず、点滴で水分補給することになった

急遽、大好きなハンバーグを嚥下しやすいようにミキサーにかけて、ガーゼにしめらせながら提供したところ、嚥下はできなかったが、「食べた」と満面の笑みを浮かべ、その時、家族は大変喜んだ

旅立つ前日には、入浴を行い心地良さを感じてもらえた

本人や家族様からの情報で好きな音楽を流し、安らげるような環境作りに努めた

N様の事例

在宅時よりHOT中であった。吸引処置など家族で行っていた

入所時は、フロアで車いすで過ごされ、食事も全量摂取できていた。4月中頃より、痰の貯留が多くなり、吸引する回数も増えた

6月初め頃より、酸素4L増量し、点滴開始となる。ベッド上で過ごされるようになる

食事や水分は本人が食べれる範囲で介助するがむせ込みが多かった。食べることが好きで特に甘いものが大好きだった

6/7点滴中止となり、苦痛が無く穏やかに過ごせるようにと家族の意向があった

6/9永眠される

・訪室する回数を増やし、楽しく会話し、穏やかに過ごしていただくことに努めた

・家族様の面会が増えるにつれ、若い時の話を聞いたり、好きなことなど情報を知り得ることでワーカー同士で何がしてあげれるかを話し合った

・体力の消耗を考えて入浴や清拭をプランにした

・食事介助も痰の絡みに細心の注意を払い、食べたいという意向を優先した（看護師や管理栄養士とも相談しながらおこなった）

・エンゼルケアは、孫様一緒にしてくださり「おじいちゃんに可愛がってもらいました」と涙流しながらに話しをしてくれた。家族にも寄り添えたと感じた。介護職員、看護師、家族様と大切な時間を過ごせた

M様の看取りを振り返り

病名：ラクナ梗塞　硬膜下血腫　症候性てんかん
四肢拘縮が強い　経鼻経管栄養であった

2月末頃より痙攣発作が出現

家族様はよく面会に来られ母親との思い出話をしてくれる

痙攣止めの坐薬を挿肛する

3月初めごろよりHOT導入

4月初めより注入食・内服薬中止
点滴開始

5月初め下顎呼吸となり、永眠される

介護職員の具体的な行動

本人が寂しくないような声かけや整容・マッサージなど行った

本人や家族様が気持ちよく過ごせるように、居室の温度やベッド周囲、部屋の環境を整えた

皮膚のトラブルを予防するため、状態を考えて入浴を行った

巡視の時間以外にも呼吸状態を確認するため頻回に部屋に行った

最期の旅立つ日が近くなり家族様が面会のたびに、日々の状態を伝えた

イベントの写真を見せながら家族と有意義な時間がとれた

U様の看取りの介護

病名：気管支拡張症　気管支喘息

既往歴：脳梗塞　心筋梗塞

車椅子でフロアに出て、読書されていた

食事も自己にて摂取される

5/2より心不全の兆候、喘鳴悪化する。酸素開始。ベッド上でギャッジアップで過ごす

5/9点滴開始。喘鳴は軽減される。ベッド上で介助するが食事量は減少してきた

6月に入って、傾眠状態も声かけに頷きあり、高カロリー飲料など飲水できる

キーパーソンの長男に鎮静剤の使用の承諾を得て、鎮静剤の坐薬を開始。長男様は、母親の病状を理解しており、苦痛がないようにしてほしいと要望がある

介護職員が主体的に行ったこと

挨拶や好きな花について声かけや、ハンドマッサージやボディタッチによるコミュニケーションを図った

よく水分を希望されたので、本人の嗜好を取り入れたものを適宜補給するように努めた

テレビやラジオを流したり、室内の環境や温度調節を行い、過ごしやすいように努めた

サプライズで誕生日会を開催し、日中、閉眼していることが多いU様が、しっかり目をあけて、笑顔をみせてくれ家族と共に喜びをいただいた

1年前の私たちは・・・

- 関わっていくうちにどんどん弱っていく姿を見るのはつらかった
- 看取りと言われてもなにをすれば良いのかわからなかった
- 自身の経験のなさから不安でいっぱいだった
- 声かけの方法やケアの方法について、状態が悪化したときに対応できるか今でも不安である
- 喪失感を経験するかもしれないと思うと自身のメンタル面の心配があった

看取りを振り返り、今の気持ちは・・・

・最期は、安らかな表情で旅立つ瞬間に立ち会うことができて尊い気持ちや感謝の気持ちでいっぱい

・今まで生活されていた環境で家族に見守られ旅立つ場面に寄り添えて良かった。今後も寄り添った介護をしたいと思った

・高齢の入所者様は、いつどのようなことがおきるかが分からない。安楽、安心していただけるように「寄り添える介護」を提供したい

・「こうしてあげればよかった」と後悔が残るのも現状ではあるが、今後の看取りの介護に活かせような行動をしたい

・本人と家族様へねぎらう言葉をかけるようになった

・看取りをすると精神的なショックがあったが、しのびのカンファレンスを行い、スタッフ間で体験を共有することで、ほっと安心できた。しのびのカンファレンスの重要性を感じた

多職種との協働

人生の住み慣れた家庭と同様の環境で看取りのお手伝いをしたい

施設では大切な家族をお預かりしているので「お亡くなりになる」「看取り」というワードから、「旅立つ」「緩和」に変化させている

在宅ケア科医師の指示で、点滴や酸素投与を行われる際は、家族様に丁寧に説明する

医師、看護師、他職種が本人と家族を支える支点からずれないように、日々変化する状態を報告し共有する。また、介護職員が迷ったり、不安に思うことがあれば、表出しやすいように話し合いアドバイスをする

エンゼルケアの時は、介護職員を一緒にそれまでの人生を振り返り思い出話をしたり、敬意を表して行うように努めている

本人・家族の意向を確認して見取り介護に関する同意書作成と支援計画書を状態応じて内容を検討し、本人に好きだったことやしたいことなど情報収集し目標を立てる

介護職員が中心となって寄り添う介護支援が行えるように、家族、各職種間の情報共有の調整する

家族は、看取りの話しをすると、受け止める気持ちに整理がつかないこともあるため、相談にのるように努めた

旅立ちに際して、強い悲しみがみられた家族様に落ち着くまでそばでいた。また、写真をみて昔の話しをしていただいた。

看取り介護を行う以前にくらべ、入所者様の人生や生き方を大切で生活支援にとって欠かせないことだとより感じた

看とり、緩和ケアは普段の生活の延長線上にあるものと捉えて、変化する身体状況に合わせながら、その時その時にできる最大限のその人らしい暮らしを支援する
臥床時間が長くなることで生じる倦怠感や痛みに対して、リラクゼーションや離床、四肢の運動など可能な範囲で身体を動かす機会を作り体や心の苦痛を緩和する
介護職員が少しでも不安を抱えずに日常ケアが行えるように、身体介助の方法や環境設定について相談しアドバイスを行う
本人・家族のしたいことや思いを中心に、各職種が同じ方向に向かってそれぞれの専門性を活かした関わりができることを目指す
家族が見ていない本人の様子など、面会の時に伝えられるようにする

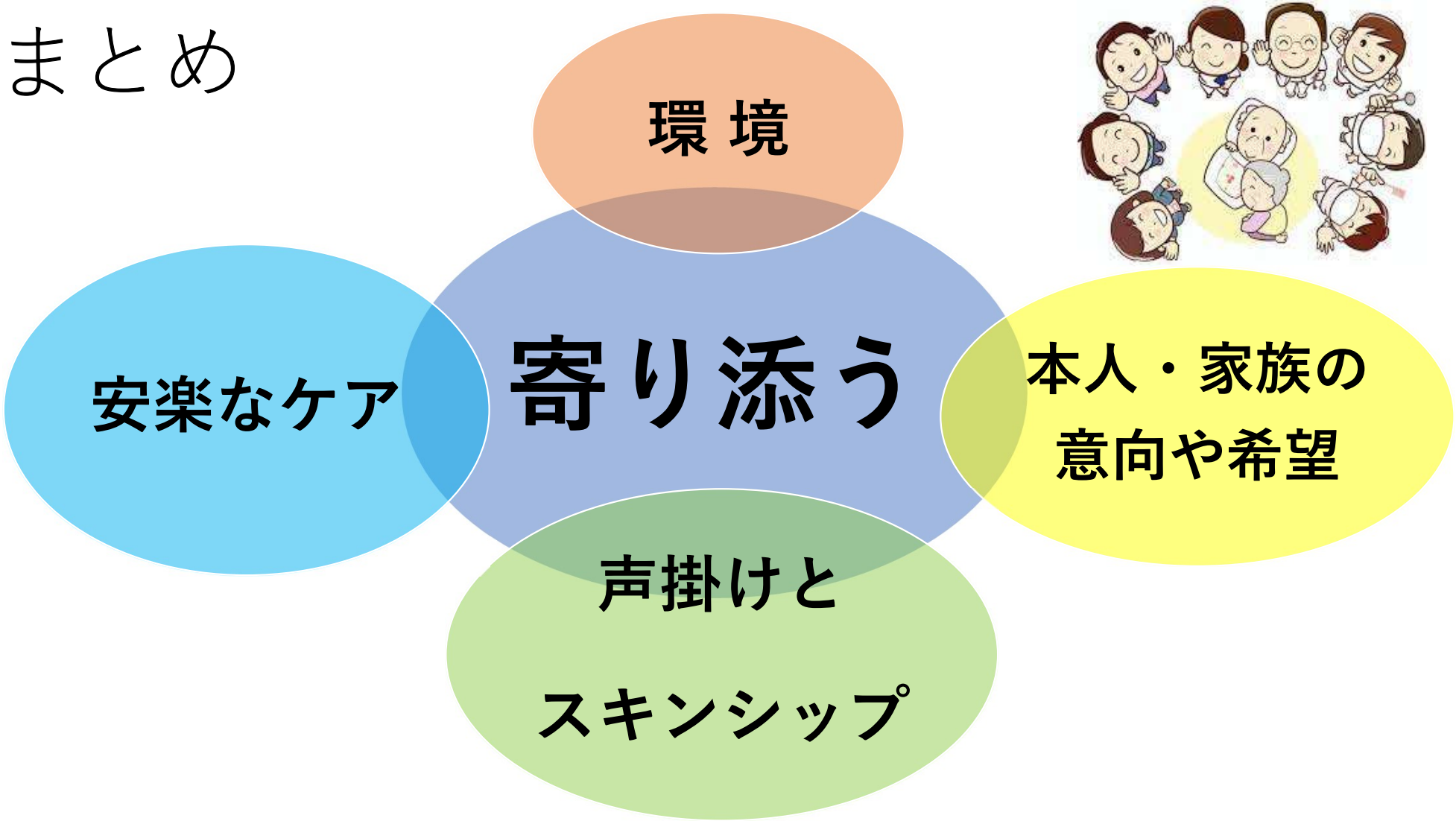
緩和の方に関わらず食事にむせることが多くなり、食事形態を変更する時は、本人の食事への意欲や嗜好品を大事にしている

嚥下機能が低下すると判断に悩むことがありＳＴに評価を依頼している

家族様がこれなら食べるかなと持ち込んでくれたものをミキサーにかけとろみ粉でジュースやゼリー状に工夫して提供した。少しでも甘さや香りを感じてもらえたケースもあった。また、水分や補助食も摂取できなかった時は、葛藤やもどかしさが残ったケースもあった

栄養士として日々変化する嚥下機能を観察し適切な形態のものを提供したい

まとめ



～イベントの様子～

看とりケアチーム

ご清聴ありがとうございました